

No. 198 地学 フズリナ類 (紡錘虫類)

フズリナ類は、殻を持ったアメーバーのような有孔虫の仲間で、古生代石炭紀前期末～古生代ペルム紀末(約3億2000万～2億5000万年前)に熱帯～亜熱帯の浅い海で大繁栄しました。石炭紀およびペルム紀の時代を決める化石(示準化石)の1つです。

フズリナ類は、図1のようにらせん状に巻いた石灰質の殻を持ち、その内部は隔壁という壁によって多くの部屋に仕切られています。部屋は最初にできた部屋(初房)を包み込むように順に発達しています。殻の外側は単純な形態をしているため、外側の形態だけで種類を区別するのは困難です。しかし、内部は複雑で種類によって異なるので、顕微鏡で内部構造を観察して種類を区別します。

写真1は葦北郡芦北町に分布するフズリナ類を含む石灰岩、写真2はその石灰岩中のフズリナ類の顕微鏡写真です。このフズリナ類はネオシュワゲリナ(Neoschwagerina)というグループの1種です。ネオシュワゲリナの仲間は古生代ペルム紀中期(約2億7000万年前)に生きていたことから、この石灰岩ができた年代は古生代ペルム紀中期だとわかります。

産地一帯の地層は、中生代三畳紀中期～ジュラ紀前期(2億4700万～1億7400万年前)の堆積物が古生代の堆積岩を取り込んでできたものです。フズリナ類を含む石灰岩もそうして取り込まれた岩塊の1つです。(廣田志乃)

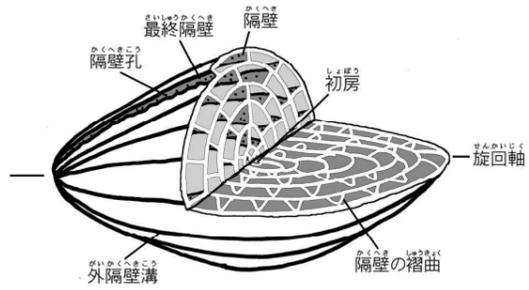


図1 フズリナ類の立体図



写真1 フズリナ類を含む石灰岩(中の粒状のものがフズリナ)



写真2 フズリナ類の断面の様子(写真の横幅 約2mm)



熊本県博物館ネットワークセンター

ホームページ  
<http://kumamoto-museum.net/kmnc>

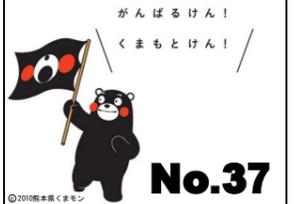
〒869-0524  
熊本県宇城市松橋町豊福1695  
TEL 0964-34-3301  
FAX 0964-34-3302

メールアドレス  
hakubutsuse@pref.kumamoto.lg.jp

編集・発行  
熊本県博物館  
ネットワークセンター  
宇城市松橋町豊福1695  
Tel 0964-34-3301  
2017年7月31日

熊本の自然と文化

熊本県博物館ネットワークセンターだより



開催しました!

パレアアジア企画展関連シンポジウム  
「大規模災害時における博物館の役割」  
2017年7月5日(水)午後1時30分～4時30分



フィールドミュージアムへ飛びだそう!  
「海辺の生き物を観察しよう」上天草市大矢野町  
2017年6月10日(土)午後1時30分～3時30分



移動体験教室「空飛ぶ種子」  
熊本市立大江小学校  
2017年6月24日(土)午前10時～11時30分



好評開催中!  
企画展「熊本地震と文化財レスキュー」  
1 パレアアジア展示  
8月27日(日)まで  
休館日8月14日(月)  
2 熊本県博物館ネットワークセンター展示  
9月3日(日)まで 月曜休館  
※ネットワークセンターでは日奈久断層のはぎ取り標本(約2m×6m)の展示を行っています。

博物館ネットワークセンターの活動に参加してみませんか

熊本県博物館ネットワークセンターでは、移動体験教室として「ドングリクラフト」「貝がらクラフト」「草木染め」など、体験を通して自然や文化に触れることができるプログラムを準備しています。PTA活動や子ども会活動で利用してみませんか。熊本県博物館ネットワークセンターの職員がお伺いします。

体験に係る費用は材料費と職員の交通費で、謝礼は必要ありません。

この他、講座や自然観察会も開催しております。申し込み方法やプログラム内容は、博物館ネットワークセンターのホームページか、公民館や県内博物館等に配布してあるセンターの年間活動案内をご覧ください。

No. 194 箱膳 民俗

箱膳とは、約30cm四方、高さ約20cmほどの箱型で蓋付きのお膳のことです。引出が付いたものもあります。江戸時代に商家の使用人が使い始めたのが始まりといわれています。それが広まり、昭和初期には全国的に使われていました。

箱膳の中には茶碗や皿、箸などを収納していました。食事の時は蓋を裏返して箱の上に置き、その上に食器を並べて使い、食事が終わると使った食器にお湯を入れて飲み、布巾で拭いてまた箱膳に収納しました。昔は食事のたびに食器を洗う習慣はなく、月に数回洗う程度でした。水道のない時代には、食事の度に食器を洗えるほど水を自由に使うことができなかつたこともあります。油を使う料理が少なかったため、毎回食器を洗う必要がなかったことも理由の一つです。

かつては家族一人一人が自分の箱膳と食器を持っていて、食事の時にはそれぞれが自分の膳を取り出して準備し、それぞれが自分の食器を洗って片付けていました。明治になり西洋の食事スタイルが広まると、食事はちゃぶ台やテーブルを家族で囲んでするようになります。また、西洋の食文化が広まり、油で調理したものが増えたため、衛生の面から食器を毎回洗うようになりました。



(迫田久美子)

使用地：八代市 寸法28×28×17cm

No. 195 サシバ *Butastur indicus* (タカ科) 動物

サシバ(写真1)は全長約50cm、翼開長約110cmのタカの仲間で、熊本県では4月頃に夏鳥として飛来します。翼が細長く、喉に2本の白い縦線があり(写真2)、「ピックイー」と聞こえる独特の鳴き声の特徴です。主な餌はヘビやトカゲ、カエルといった爬虫類や両生類のほか、ヤマユの幼虫やカマキリなど大型の昆虫類で、それらが豊富に生息している谷津田の周辺で繁殖します。谷津田とは小さな谷に作られた細長い田んぼの事ですが、近年は減反などでこうした環境がすっかり減ってしまい、それに伴ってサシバの個体数も全国的に減少しているようです。

熊本県では低山部を中心にサシバの繁殖地が散在していますが、あまり多いものではなく、見つけるのは簡単ではありません。しかし、10月頃になると、本州～九州北部で繁殖を済ませたサシバたちが熊本県周辺の上空を通過して南西諸島へと渡るため、県内各地でサシバを見るチャンスがあります。

「ピックイー」という声が聞こえたら、空を見上げてみて下さい。そこには細長い翼のタカが、弧を描きながら舞っているかもしれません。(中藺洋行)



写真1

写真2

No. 196 綱利公御祝言記録(写) (熊本市辛島家資料) 歴史

本資料は、全75頁からなり、寛文3年(1663)6月12日から行われた細川綱利と犬姫が婚礼した時の記録を書き写したものです。

本資料に書かれている細川綱利とは、肥後熊本藩3代目の藩主のことで、犬姫は、水戸藩初代藩主である徳川頼房の9女として生まれ、その後は異母兄である讃岐高松藩主松平頼重の養女となった人物です。

写真を見ると、「寛文三年癸卯六月十二日於江戸上屋鋪(敷)御婚礼御規式之事」とあり、その内容は、「上使として老中阿部豊後守忠秋が来て、綱利の祝言は6月中に出来る様にとの上意を伝えたこと」や「加々爪甲斐守直澄と瀧川長門守利貞が婚礼の取り持ちをする様に老中より言われたこと」などが記されています。

2頁目以降には、「御結納之御祝儀之事」という表題が付けられ、「一 裕 五重」と書かれ、「御息女江」と誰に何を差上げたのかが記されています。

本資料には、表題ごとに多くの品物名や人名が書かれており、細川綱利の婚礼について、または当時の大名婚礼における贈り物についても知ることができる資料です。(堤将太)

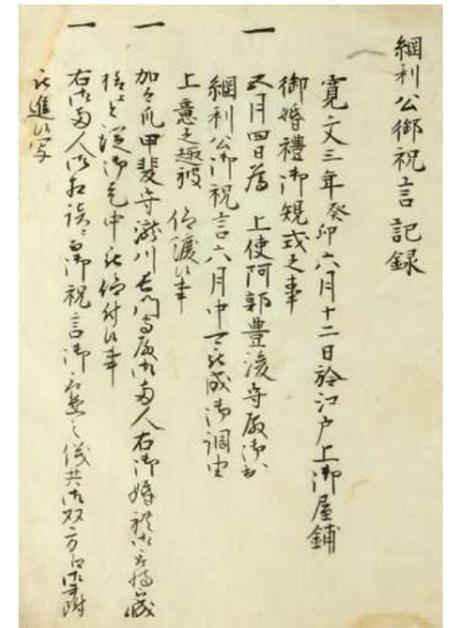


写真 1 頁目表題部分

No. 197 モウセンゴケ *Drosera rotundifolia* L. (モウセンゴケ科) 植物

植物といえば、水があつて太陽が当たっているとすくすくと育つイメージがありますが、自然の中には植物が育ちにくい環境もたくさんあります。そのような環境でも、植物は様々な工夫をして生き抜いています。土中の栄養が少ない環境に生える食虫植物は、足りない栄養を捕らえた昆虫類などで補っています。

モウセンゴケの葉は柄が長く伸びたしゃもじのような形で、表面には細い毛がたくさん生え、その毛の先端には球状になった粘つく液が付いています(写真1-a)。この液が虫を捕らえるためのトラップであり、消化液でもあります。小さな虫が葉に触れて、液に粘つかれて動けなくなると、葉がだんだんと虫を巻き込み、虫を溶かして栄養を取り出します(写真1-b)。

モウセンゴケは日本でもっともよく見られる食虫植物のひとつです。日当たりの良い湿地でよく見られ、6月頃には白い花を咲かせます(写真1-c)。写真2の標本は阿蘇で採られたものです。阿蘇の草原のくぼ地では水がしみ出して湿地や小川になっているところがあり、モウセンゴケをはじめとする様々な湿性植物の大切な生育環境となっています。(前田哲弥)



写真1



写真2